

Title	巻頭言 現代デモクラシー社会における中心の探求 : 聖学院大学創立 20 周年記念論文集発刊に寄せて
Author(s)	阿久戸, 光晴
Citation	聖学院大学論叢, 21(1): 3-9
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2526
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

現代デモクラシー社会における中心の探求

— 聖学院大学創立20周年記念論文集発刊に寄せて —

学長 阿久戸 光 晴

1. 中心を持つ本学

聖学院大学は2008年4月に創立二十周年を迎えた。これまでの学院理事会・旧女子聖学院短期大学を含む法人傘下各校・後援会及び同窓会をはじめとする各関係者のご支援に深く感謝したい。

それにしてもこの間の社会変動の大きさには目を見張るばかりである。まず冷戦が終結した。ソ連が崩壊して米国一極支配体制となり、EUが結成され、その帰結は、地域紛争の激化となり、あの「9・11」の大惨事や続発する自爆テロ事件とその後のテロとの戦いと称する「アフガン戦争」や「イラク戦争」の勃発、北朝鮮核武装化や拉致事件をめぐる六カ国協議の混迷などとなった。また日本を含む世界の国々が米国資本を事実上中核とする巨大な経済グローバリゼーションの激流に呑み込まれた。⁽¹⁾日本においても、国有鉄道が民営化され、国公立大学が擬似民営化である独立行政法人大学となり、また金融ビッグバンと郵政民営化も始まった。しかしその間、阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件、耐震偽装事件、品質偽装事件、政官財の癒着汚職の続発、通り魔殺人の増加、そして教育の荒廃とそれに対する教育基本法「改定」となった。⁽²⁾こうした惨状に対する決定的追い打ちとして、米国のサブプライムローンやリーマンブラザーズの破綻をきっかけとした金融危機とその後の日本を襲う世界同時大恐慌の再来の懸念である。一方でコンピュータ操作によって一朝にして巨億の利益を得る者が現れるかと思えば、家族がリストラされ就職内定が取り消され過酷な派遣労働しか道のない極貧の者が増えるという、貧困化・格差社会が現れている今日である。⁽³⁾西暦第三ミレニアムに入り、希望に満ちた将来展望を描けるとは到底言えない世界および日本の現状である。

しかし80年前、フランクリン・ルーズヴェルトはニューディール政策によって世界同時大恐慌を克服したとはいいがたいかもしれないが（ちなみに結果としてそれは第二次世界大戦の勃発に起因された戦時特需によるものと言わざるを得ず、今回その道をたどることは断じて避けねばならない）、⁽⁴⁾一つの名言を残した。それは「私

たちが真に恐れるべきは『恐怖』そのものである」と人々に訴えたのである。その言に従えば、私たちは「私たちが真に克服すべきは、『経済問題』そのものの前に『絶望』と『諦念』である」と言うべきであろう。それは人間精神の危機の克服課題にほかならない。高等教育機関の使命は、この課題に組織を挙げて取り組むべきであろう。絶望と諦念の克服とはつまるところ精神の課題に他ならない。それは明確な精神、深い思索に裏打ちされた明瞭な理念を、自覚した者たちが共有することであろう。

ところで聖学院大学は、その創立にあたって「聖学院大学の理念10カ条」を掲げ、その理念から経営、人事、教育、研究、教育行政、社会奉仕活動その他あらゆる営みを遂行してきた。特にその第1条に、本学が「霊的次元の成熟を柱とした全体的な人間形成に努め」ることに精励する学術研究・教育共同体であることを宣言している。また第2条に、本学は「プロテスタント・キリスト教の伝統に即してなされる礼拝を生命的な源泉とする」ことを明らかにしている。ここには、本学が高等教育機関であることを当然の前提にしつつ、全体としての人間理解に「霊性(スピリチュアリティ)」の次元のあることを明確に主張している。⁽⁵⁾また本学が高度な総合的理性をもって学問追究を営む大学である前に、世界史をリードしてきたプロテスタント・キリスト教の伝統を現代に継承して聖書に基づく超越次元からの呼びかけに傾聴し応答する敬虔に支えられた倫理的知性で考察する研究・教育共同体であることを公に告白している。

2004年11月23日、本学にチャペルが献堂された。大学が‘multiversity’でも‘monoversity’でもなく正に‘university’である以上⁽⁶⁾多様性の中における求心力として本来何らかの中心を必要とする。しかもそれは抽象的な理念であるだけでなく、その理念を体現するシンボルあるいはメタファーが存在することが求められるであろう。本学の理念としての中心は前述の「大学の理念十カ条」であり、そのシンボルあるいはメタファーとしての役割を担うものが、時間軸の中心である全学礼拝と空間軸の中心としてのチャペルである。全学礼拝とともにチャペルが与えられたことにより、名実ともに「礼拝を生命的な源泉とする」ことが可能となった。このチャペルはこの世界が上方の超越次元に結びついている表現である天蓋を持ち、私たちが置かれたこの地上世界は決して閉塞空間でなく、「絶望」と「諦念」を克服する天来の力（正に霊的生きる力である）の確固たる存在を証している。

本学に、大学におけるあらゆる営みの空間の中心が明確化され、それによって時間の中心がしっかり守られていくことが可能となった。無論現在チャペルは本キャンパスにおいて周縁部分に位置し、時間割構造の中で学生および教職員の動線を考えてもチャペル礼拝には関係者の大きな奉仕的協力を要する現実があり、克服すべ

き多くの問題があろう。しかし本キャンパスにおけるチャペルの位置は、後述のとおり今後の本キャンパスの発展計画への展望を与えるものであろうし、礼拝時間も時間軸の中心に位置させ続けるための関係者の持続した知恵が必要となろう。しかしこのチャペルは決して全学礼拝や緑聖教会の聖日礼拝にだけ用いられるものではないであろう。真理探究のための学術講演会、地元の方々のための文化講演会や音楽会など、我々の心を高めてくれるような種々の教育的・文化的営みは、正に本学の理念を本質において要約した「敬虔と学問」‘pietas et scientia’に適い、理念第5条の社会貢献にも寄与するであろう。⁽⁷⁾

2. 現代の究極の問題としての中心の喪失

ところで、ハンス・ゼードルマイヤー Hans Sedlmayr による ‘Verlust der Mitte,’ (Salzburg, 1948) は19世紀および20世紀前半の欧州の造形美術を吟味し、その奥に潜む人間精神を診断し、その共通傾向を一つのキーワード「中心の喪失」で結論づけた。その分析は、次の7点にまとめられる。①純粹領域の分離拡大あるいは即物化、②極端化および対極化、③非有機化あるいは石化、④地上からの遊離あるいは無地盤性、⑤混沌への憧憬あるいは下方志向、⑥天地無用の逆あるいは「上下」撤去、⑦中心から先へあるいは人間離脱へ。ゼードルマイヤーは、これをさらに要約して、「芸術は人間から、万物の尺度から出てゆこうと努める。……人間は人間から先へ出てゆこうと努める」、そして「人間が〈中心〉から先へ、人間から先へ出てゆこうとするのはなにも芸術に限らない」という。こうして美術史家ゼードルマイヤーは、第2次大戦後の人間精神がニヒリズムへ突き進む、言わば必然性を明らかにしている。⁽⁸⁾

この彼の問題提起を受け止めたのは、神学者ヘルムート・ティーリケ Helmut Thielicke であった。ティーリケは「彼の解釈のあらゆる一面性にもかかわらず、彼がこの標語（注、「中心の喪失」）をもって決定的な原動力を言い当てた」と評する。中心の喪失は「人間の自己喪失」になる。なぜならそれは、ちょうど恒星を失った惑星が軌道を外れ、他のもろもろの引力に牽引され、宇宙の放浪者になっていくに等しいからである。ティーリケは明確に断言する。神への関係喪失とともに、「われとなんじ」関係における「なんじ」喪失により人格主体の「われ」も見失われ、かくして自己は外在的諸力に作用された現象的存在となると。これを彼はゼードルマイヤーから学んだニヒリズムと称する（‘Der Nihilismus,’ Pfullingen, 1950）。⁽⁹⁾

熱心なカトリック信者であったゼードルマイヤーは、19～20世紀の美術に現れた近代精神に、「中心の喪失」という病状を見出し、その回復策として「全体的な人間から発して全体的な人間へ帰りゆく」ことを目指すことを提起する。もしそうでな

ければ、中心にあらざる者が中心に座り、部分となった人間、客体となった人間を擬似全体性の中にはめ込む力が猛威を振るうようになると警告する。これはナチズムをはじめとする、あらゆる全体主義を指し示すだけでなく、ウェーバーの言う「鉄の檻」に人間を閉じ込める官僚支配体制、マンモニズムを偶像神とする大量消費的
巨大資本主義の生活様式にも、重大な警告を発している言葉である。¹⁰⁰しかし「全体的な人間から発する」とは具体的にいかなる意味であろうか。本学は、まさにその「大学の理念」第1条の「霊的次元の成熟を柱とした全体的な人間形成に努め」る使命に、一つの応答を用意する。

3. 現代デモクラシー社会におけるもう一つの中心の喪失

ところで現代社会はもう一つの「中心の喪失」を持っている。近現代国家においてはまさに中心の喪失が本質的課題である。近代デモクラシー体制は、父権的国王を廃し、そのことにより構成員の周縁部分を含め全体の活性化を図っている体制である。すなわち家父長体制‘Paternalism’という中心の排除こそ近代デモクラシー体制実現の方法論であった。旧約聖書・箴言に「いなごは王がないけれども、みな隊を組んでいて立つ」(30章27節)という言葉がある。王はもはやいないが、中心がなく求心力もなく、いなごは隊を組めるかという課題が近現代社会に残されたのである。端的に言って、父権的国王でない新しい中心とは何かという問題である。また事実日本国憲法では、中心があいまいであるといえる。ある人にとって国家の中心は「象徴天皇」であり、別の人にとっては「国権の最高機関である国会」であり、さらに別の人にとっては「主権の存する国民」であるということになる。逆に三権分立、チェックアンドバランス、多選制の禁止、地方分権など、この憲法はあらゆる工夫により「中心の拡散」を懸命に図っている。しかし日本国憲法における権力分立制はまさに「中心の拡散」である。見えざる中心が明確に見えていなければこれらの「中心の拡散」、良い意味の「中心の喪失」は求心力の喪失、社会の形成力の崩壊というまさに現代日本社会で現象化されていることが裏づけられることになる。新憲法起草案をGHQ当局より突きつけられたとき、戦後日本の為政者代表らは、驚愕したと言われる。それは、代表者らに「中心の喪失」への深刻な恐れがあったのである。明らかに大日本帝国憲法では明確な「中心」があった。それは言うまでもなく神権天皇である。新憲法案への驚愕はカオスをもたらす中心の喪失への恐れであった。¹⁰¹

それでは新憲法下での中心とは何であろうか。真の中心は、権力集中を防ぐという仕方で反語的に暗示される。生身の特定の人間が終身的に中心を演じきれるもの

ではない。しかし、国民が見えざる中心を普遍的に共有してこそ、社会形成の求心力が生まれる。日本国憲法も、基本的人権の尊厳、国民主権、永久平和、地方自治など、価値観を提供している。近代立憲主義体制を築くに大きな貢献があったアメリカ・ピューリタンたちは、まさに見える国王を中心に置かず、見えざる神を中心に社会と国家を築くために、数々の「中心の拡散」を図った。それは真の中心を求心力とするための、擬似中心の廃棄であった。この信念はやがて世俗化され、近代憲法の根本規範理念として一般化されるようになる。この根本規範、根本価値こそ近現代社会の中心を担いうるのである。この価値が普遍性を持つと構成員が確信し共有できる時、新しい求心力、中心の再建が始まる。これは国家だけではなく、社会はもとより、家庭においても適用されることである。かつての家庭の中心が家父長であったのに対し、男女同権・男女の役割分担と共同参画という新しい理念を中心に、親はそうした家庭の求心力を率先して指し示すところに、逆説的ながら新しい尊敬を受けるに値することとなる。¹²⁾

4. 真の中心の回復の希望

ところでチャペル設計に着手直前に、設計者香山壽夫氏のご指摘であったが、それ以前に建設された旧短大および大学の諸建物群の南側の縁を結んでいくと扇形ができていた。扇形は円の一部であり、固有の中心をすでに持っている。それは人間に気づかれにくい見えない中心である。しかしその見えない中心がいったん「見えるようになる」と、今まで雑然と並んでいたかに見える諸建物群が意味ある位置にあることが分かり、諸建物群は「建物共同体」をなしていることが見えるようになるだけでなく、今後の将来の放射線状の建設計画まで見えるようになる。ちなみに、後日航空写真によれば、このキャンパスを囲む武蔵野の丘陵の形状もまたほぼ同じ位置の中心を持っていることが判明した。これは大変暗示的なことであった。

見えない中心が見出されることにより、すべての建物群が意味を持つことになった。そして見えない中心がシンボルとして指し示す「真の中心」を、仰ぐための見える中心がチャペルとして築かれることにより、さらにすべての建物群固有の役割もまたあらためて見出されることになる。そして文化と社会と個人だけでなく、自然も中心を求めている。¹³⁾

チャペル内には、特別の「中心の椅子」がある。それは「イエス・キリストの椅子」として、「座らずの椅子」にしている。それは、本学において中心は生ける神であり、見えざる中心（種々の見えるシンボルが多々表現するとしても）を聖餐桌のように囲んで、すべての構成員が固有の役割も担って活性化していく共有精神の表現であ

る。そしてさらにそのことは、中心の喪失という功罪両義的現代日本社会・国家の問題への一つの先駆的表現であろうとしている。本学の中心はとこしえに、父・主イエスキリスト・聖霊なる三位一体の神である。しかしこの社会との接点で言えば、近現代社会の求心力を持った中心は、社会全体を共同体としてまとめていく見えざる理念である。その見えざる理念のさまざまな表現として、近代憲法があり、現代社会の普遍的規範があるということになる。⁽⁴⁾

今回の創立20周年記念として、本学は通常行われるパーティ形式の祝賀を一切やめて、学生・一般人への教育・研究還元として、この日本に「日本国憲法」が与えられた歴史的意義を解明し、国際平和・人権・主権・地方自治・脱貧困・異文化共生・福祉社会などの根本問題と取り組んだ。このコンテキストにおいて、本学論叢記念号所収論文の数々もまたそれぞれの分野における各教授の思索と実践による現代デモクラシー社会への貢献の足跡である。これからも私たちは、現代社会の根本問題と取り組み、真の中心を探求しつつ、学問における研究と教育をとおして、この社会に貢献していきたいと考える。

註

- (1) グローバリゼーションには両義性がある。資本力の浸透という側面と普遍的理念の広がりという側面である。これを見極めなければ判断を大きく誤る。拙文「グローバリゼーションの両義性」(『聖学院大学総合研究所紀要』No.33巻頭言, 2005年)。そのほか、ジョン・グレイ、石塚雅彦訳『グローバリズムという妄想』日本経済新聞社, 1999年。アンソニー・ギデンズ、佐和隆光訳『暴走する世界』ダイヤモンド社, 2001年。サスキア・サッセン、伊豫谷登士翁訳『グローバリゼーションの時代』平凡社, 1999年。
- (2) 拙著「『教会と国家の分離』体制におけるキリスト教学校の使命」(『キリスト教学校の形成とチャレンジ 教育の神学第3集』所収, 学校伝道研究会編, 聖学院大学出版会, 2006年)。
- (3) 現代の格差社会がもたらしている人間破壊がいかにもすさまじいものであるかは、本学でも講演された湯浅誠氏の書に詳しい。『貧困襲来』山吹書店, 2007年。『反貧困』岩波書店, 2008年。など。
- (4) フランクリン・ルーズヴェルト第32代米国大統領のニューディール政策による不況克服の有効性については、今後の慎重な研究にゆだねざるを得ない。オバマ第44代米国大統領はその多くの演説でF・ルーズヴェルトの政策の引用を避けている印象が強いことが注目される。それならば現代の80年ぶりとも言われる未曾有の経済大不況克服をいかにしてなすべきか、検討が急務である。
- (5) 大木英夫「霊的次元の回復」(『宇魂和才』の説) 所収) 聖学院大学出版会, 1998年。現代社会がいかにして霊的次元を喪失してきたかについては、R・H・ロークマーカー H.R.Rookmaaker, 由水常雄訳『現代美術と文化の死滅』すぐ書房, 1979年。'Modern Art and the Death of a Culture,' London, 1970。また共同体の価値の中心の考察について、C. David Grant, 'God the Center of Value,' Texas Christian University Press, Fort Worth, 1984。
- (6) 大学のあり方については、ベリカン、田口孝夫訳『大学とは何か』(法政大学出版局, 1996年)

が現在でも参考になる。

- (7) 拙文「中心の発見・中心の回復」(『緑信叢書』35チャペル献堂記念号所収) 聖学院キリスト教センター, 2007年。
- (8) ハンス・ゼードルマイヤー, 石川公一・阿部公正訳『中心の喪失』, 美術出版社, 1965年。特にその第7章が鋭い指摘である。
- (9) ヘルムート・ティーリケ, 志波一富訳『ニヒリズムの時代』 創林社, 1978年。特に159頁～。
- (10) ティーリケ前掲書, 215頁～。
- (11) 前掲拙著「『教会と国家の分離』体制におけるキリスト教学校の使命」158頁。ジャスティン・ウィリアムス, 市雄貴・星健一訳『マッカーサーの政治改革』 朝日新聞社, 1989年。
- (12) 現代家庭の中心の喪失については, 小此木啓吾『家庭のない家族の時代』(ABC出版, 1983年)に詳しい。
- (13) 大木英夫『現代人のユダヤ人化』 白水社, 1976年。その中の「自然の終末論的考察」が示唆に富む。
- (14) 拙論文「Constitutionalism (立憲主義) の神学的起源」(『聖学院大学論叢』 第11巻第2号所収, 1999年)